

陸域

【絶滅危惧Ⅰ類】

ニシノシマガセル・オキビロウドマイマイ・アラハダシロマイマイ（継続）

ハンジロギセル（昇格）・イワミマイマイ（新規）

ニシノシマガセルは隠岐諸島西ノ島の固有種であり島内の焼火山、高崎山、国賀海岸など自然豊かな環境に生息している。近年、西ノ島の北東約1.2km沖合の無人島・星神島の生息も報告されているが、個体数は多くない。島後のみに生息するオキビロウドマイマイも生息数は少なく観察される機会が多くない。近年、島前（西ノ島、海士）から記録された個体は、殻形態及び生殖器の特徴から本土側に生息域をもつ別種の可能性が高い。また、アラハダシロマイマイは西ノ島と島後のごく限られた場所にわずかに生息している。以上の点からⅠ類継続が妥当である。ハンジロギセルは大田市大江高山をタイプ産地とするキセルガイ類であるが、タイプ産地での生息環境の変化で生息数は減少している。本種は安蔵寺山一帯のブナ林にも生息が見られるがきわめて希少である。Ⅱ類からの昇格が妥当である。情報不足とされてきたイワミマイマイは県西部津和野町をタイプ産地として記載された大形のマイマイ類である。山口・広島両県に近い安蔵寺山一帯のごく狭い範囲に生息すると考えられる。近年、複数個体の生体が採集され生殖器等の知見が得られた。本種の生息環境保全には十分留意する必要がある。Ⅰ類への昇格が妥当である。

【絶滅危惧Ⅱ類】

オキムシオイ・オキゴマガイ・オキノクニキビ・ヒメナミギセル・オキシメクチマイマイ・オキニシキマイマイ（継続）

イトウムシオイ・オカムラムシオイ・ヤマメタニシ・クリイロギセルモドキ・カワモトギセル・モリヤギセル・シイポルトコギセル・ダイセンニシキマイマイ（昇格）

トサギセル・ホソヒメギセル（新規）

オキムシオイ、オキノクニキビはともに隠岐固有種とされてきたが、近年の調査で他地域でも同じ特徴を持つ個体が記録され、両種に同定されている。しかし、いずれの産地でも個体数が極めて少ない。隠岐をタイプ産地として記載された種としてはその生息は貴重である。オキムシオイ、ヒメナミギセル、オキシメクチマイマイ、オキニシキマイマイのタイプ産地としての保全は重要である。ムシオイガイ類のイトウムシオイ、オカムラムシオイの生息は生息環境の変化により徐々に厳しくなっている。ヤマメタニシは島後でも確認されているが、本土側の生息とともに生息は局限している。クリイロキセルモドキの県西部における生息は、分布の西限として極めて重要である。樹上性で個体数はきわめて少ない。シイポルトコギセルは益田市沖合に浮かぶ高島にも生息することが確認され、飛び地的に分布する県西部の空白を埋めることができた。カワモトギセル、モリヤギセルは山地の古木・倒木に生息するが、近年生息数が少なくなっている。中国山地のブナ林に生息する大形のマイマイ類であるダイセンニシキマイマイの生息数も減少している。以上の点から準絶滅からⅡ類への昇格が妥当である。今回新たに小形のキセルガイ類、トサギセルとホソヒメギセルの2種を登録する。両種は県西部のブナ林で古木・倒木に生息し、生息地は局限し、個体数も少ない。その生息は極

めて貴重であり環境保全に配慮を要する。

【準絶滅危惧】

アズキガイ（継続）オキマイマイ（降格）

カサネシタラ・チョウシュウシロマイマイ（新規）

県内のアズキガイの記録は少ない。本種は自然分布とともに、他県では物流に伴う市街地周囲での生息も見られる。本県の生息は山地であり自然分布と考えられる。引き続いて準絶滅が妥当である。オキマイマイは隠岐諸島に生息するサンインマイマイの矮小型とされる。樹上性で、隠岐では比較的見る機会が多い。島嶼における矮小型として他地域でも生息は見ることができ、Ⅱ類から準絶滅への降格であるが生息の意義は大きい。近年の微小貝の調査により殻長5—6mm以下の種が多く記録されている。その中には生息地が限定し、個体数が極めて少ないものもある。カサネシタラはブナ林などの林床に生息し、殻表が鋭い階段状になる特異な形をしている。チョウシュウシロマイマイは2015年に新種記載された樹上性巻き貝である。近縁のコウダカシロマイマイと混同された種で、タイプ産地は山口県中部である。本県西部・益田市付近で、県東部に広く分布するコウダカシロマイマイと分布を接している。樹上性であり環境保全に留意を要する。カサネシタラ、チョウシュウシロマイマイの準絶滅への新規登録が妥当である。

【情報不足】

サイコクビロウドマイマイ（継続）

ヤマクルマ・ヒメコギセル・ヤマタカマイマイ（降格）

サイコクビロウドマイマイは本県西部の安蔵寺山をタイプ産地として記載された。その後本種とされる個体が県東部の枕木山、広島県、山口県、大分県、福岡県などで採集されているが、いずれの産地でも個体数は少ない。また、タイプ産地では再三の調査にもかかわらず生体が確認されていない。現在、近縁種との比較検討が行われており、今回の改訂時点では情報不足が妥当である。ヤマクルマ、ヒメコギセル、ヤマタカマイマイはこれまでの記録が少なく、近年の調査でも確認されていない。生息の可能性はあるが更なる情報入手が必要である。準絶滅から情報不足への降格が妥当である。

陸水域

【絶滅危惧Ⅰ類】

カワシンジュガイ（継続）・オバエボシガイ・ニセマツカサガイ（新規）

カワシンジュガイは記録のある周布川上流域において採取調査を行ったが、確認することはできなかった。また2024年には環境DNAによる解析を行ったが検出されなかった。他の河川にも生息する可能性があるため、Ⅰ類とした。オバエボシガイ・ニセマツカサガイは2024年に高橋により江の川水系で生息が明らかになったが、県内ではこの1地点のみであり、河川改修、森林伐採、自然災害等による土砂の流入等による生息地の悪化を考慮してⅠ類とした。

【絶滅危惧Ⅱ類】

ササノハガイ・カラスガイ（継続）

ホラアナミジンナ・キタノタガイ・カタドブガイ（新規）

ササノハガイは江の川水系、カラスガイは斐伊川水系と限られた地域に生息するためⅡ類とした。

ホラアナミジンナは殻長約1.6mmほどの紡錘形をした巻き貝である。生息は山地や里山を問わず、小溪流の礫や沈水した落葉の裏に見られる。県内の生息は近年の調査で明らかになったが、県西部の限られた地域で見ついている。生息地が比較的人里に近いことから、その生息環境の保全には留意が必要である。新たな生息地の発見が期待されるが、今回の改訂時点ではⅡ類が妥当である。カタノタガイ・カタドブガイは土地開発、大雨による土砂の流入、自然災害やヌートリア等の外来生物による捕食によって生息が脅かされている。

【準絶滅危惧】

マツカサガイ（継続） レンズヒラマキ（新規）

マツカサガイは比較的広範囲に生息することが判明したが、河川改修、森林伐採、自然災害等による土砂の流入等やヌートリア等の外来生物による捕食によって生息が脅かされている。レンズヒラマキは出雲市や益田市のため池等にみられるが、生息場所は限られるため、生息環境の保全には留意が必要である。

【情報不足】

カタハガイ・イシガイ・ヌマガイ・マジジミ（新規）

イシガイ・ヌマガイは県内に広く分布するが減少傾向にあるこ

と、カタハガイは発見例が少なく情報不足とした。マジジミはタイワンシジミ種群の侵入により置換されつつあり生息は脅かされている。本種の生息情報は不明であり、現段階では情報不足とした。

汽水域

【準絶滅危惧】

ムシヤドリカワザンショウ・ヨシダカワザンショウ・ミヤコドリ（新規）

ミズゴマツボ（継続）

ムシヤドリカワザンショウ、ヨシダカワザンショウはいずれも生息環境は水中ではなく高潮帯付近に生息し、ヨシ群落内の流木等の下で確認される。汽水域の植物が生育する場所は限られるため、生息環境の保全には留意が必要である。ミズゴマツボは宍道湖および中海周辺の他、新たに大田市や益田市で生息を確認された。また、宍道湖水が導水する松江堀川では広範囲に生息する。ミヤコドリは中海の沿岸のみで確認されている。底泥に埋没する礫の裏に付着する。このような還元環境に生息するため、生息環境の保全に留意が必要である。

（増野和幸・戸田顕史）

陸・淡水産貝類掲載種一覧

計47種

絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

○オバエボシガイ	↑ニセマツカサガイ	・カワシンジュガイ	
・ニシノシマギセル	↑ハンジロキセル	・アラハダシロマイマイ	
◇イワミマイマイ	・オキビロウドマイマイ		計8種

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

↑カラスガイ	↑ササノハガイ	○カタノタガイ	
○カタドブガイ	・オキゴマガイ	○ホラアナミジンナ	
↑ヤママメタニシ	・オキムシオイ	↑イトウムシオイ	
↑オカムラムシオイ	↑クリイロキセルモドキ	○ホソヒメギセル	
・ヒメナミギセル	↑モリヤキセル	↑シイボルトコギセル	
↑カワモトギセル	○トサギセル	・オキノクニキビ	
↑ダイセンニシキマイマイ	・オキニシキマイマイ	・オキシメクチマイマイ	計21種

準絶滅危惧（NT）

・マツカサガイ（広域分布種）	○ミヤコドリ	・アズキガイ	
○ムシヤドリカワザンショウ	○ヨシダカワザンショウ	・ミズゴマツボ	
○レンズヒラマキガイ	○チョウシュウシロマイマイ	○カサネシタラ	
↓オキマイマイ			計10種

情報不足（DD）

◆ヤマクルマ	○イシガイ	○カタハガイ	
○ヌマガイ	○マジジミ	◆ヒメコギセル	
・サイコクビロウドマイマイ	◆ヤマタカマイマイ		計8種

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種（14種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（12種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（1種）
- ：新規掲載種（16種）
- ◇：情報不足からの変更種（1種）
- ◆：情報不足への変更種（3種）

【掲載順の準拠文献等】

岡山県野生生物目録

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

イシガイ目 イシガイ科

オバエボシガイ

Inversidens brandtii (Kobelt, 1879)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

2024年に初めて確認された種であるが、現状確認されている生息地が1か所のみであり、個体数も極めて少ないため。

概要

本種は、東海・北陸以西に広く分布する淡水生二枚貝である。殻はやや台形で黒色、殻長付近に漣状の彫刻が見られる。若齢個体は、黄褐色を帯び、前後に走る皺状の彫刻が顕著にみられる。殻長は最大70mmほどで殻の内面は真珠光沢が顕著であり、橙色を帯びる傾向にある。主に、湖沼や河川、用水路などの砂礫底や砂泥底に生息する。春～夏にかけて繁殖を行い、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鱗に寄生する。

参考文献

広島県(2021) 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックひろしま 2021 貝類(淡水産)、広島県環境県民局自然環境課
北村淳一・内山りゅう(2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑、168pp.山と溪谷社、東京。
高橋拓大(2026) 島根県の江の川から得られたオバエボシガイの記録。ホシザキグリーン財団研究報告、29。印刷中

県内での生息地域・生息環境

本種は以前から江の川水系の広島県側では記録があったが、県内においては、2024年に江の川水系にて確認されている。再生産も行われているようで、60mmほどの老成個体から20mmほどの若齢個体も生息していた。しかし、個体数は非常に少なく、複数回にわたる調査でも累計で数個体程度しか見つかっていない。加えて、確認されている生息地も現状1地点のみであり、開発などによる生息地の環境変化にも留意する必要がある。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆者:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

イシガイ目 イシガイ科

ニセマツカサガイ

Inversunio yanagawensis (Kondo, 1982)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

県内で確認されている確実な生息地が1か所のみであり、個体数も非常に少ないため。

概要

殻は卵円形で膨らみがあり、後縁は丸く少し湾曲している。殻長は最大80mmに達する。殻長付近には顆粒状の模様があり、後背縁には放射状の模様が見られる。主に小川や用水路の砂礫から砂泥地に生息する。2年で性成熟し、繁殖期は秋である。マツカサガイと酷似するが、水管の形状や幼生期には鉤状突起を有する点などから見分けることができる。

参考文献

北村淳一・内山りゅう(2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑、170pp.山と溪谷社、東京。
Sayenko, E. M. et al. (2020) Taxonomic status of genera *Nodularia*, *Middendorffinaia* and *Inversunio* (Bivalvia: Unionidae) from South-East Asia: morphometric, genetic and GenBank data. Systematics and Biodiversity, 19: 54-73。
高橋拓大・上地健琉(2025) 島根県の江の川から得られたニセマツカサガイの記録。ホシザキグリーン財団研究報告、25) 288。

県内での生息地域・生息環境

県内での記録は、県東部の1河川で確認されていたが、本種とされていた個体はマツカサガイの誤同定である。その後の調査でも、同河川では本種を確認できておらず、東部での生息状況は不明である。2024年に江の川水系にて生息が確認され、現状唯一の確実な生息地となっているが、生息数は非常に少ない。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

特記事項

江の川水系のニセマツカサガイは、遺伝的・形態的特徴から隠蔽種、cf. *yanagawensis* 2であることが示唆されている。

(執筆者:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

イシガイ目 イシガイ科

カワシンジュガイ

Margaritifera laevis (Haas, 1910)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



選定理由

本種は、かつて島根県の中央部を流れる周布川水系の上流には、普通に生息していたものである。これらは1937年にカワシンジュガイの南限地として、国の天然記念物に指定され、旧金城町波佐では保護されていた。しかし、再三にわたる水害と河川改修のために生息が確認できなくなり、1971年に天然記念物の指定は解除された。だが、これらの水系のいずれかには生息していると考えられる。

概要

本種は、北海道と本州に分布し、山間地域の清流の砂礫底に生息する二枚貝で、殻長は最大100mmに達する。殻高50mm前後、殻幅は42mm前後になる。殻はやや厚質で黒色、殻長は前方に寄り、腹縁は僅かにくぼむ。殻の内側は真珠光沢が顕著である。川底に後端を立てて生息しているため、生息地ではタチガイ(島根県)、タチツガイ(広島県)という方で呼ばれている。

参考文献

北村淳一・内山りゅう(2020)日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑. 170pp.山と溪谷社, 東京.
増田 修・内山りゅう(2010)日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類: 172-173.ピーシーズ, 神奈川.

県内での生息地域・生息環境

左記のように、旧金城町波佐の周布川水系に生息するものは、国内での生息南限地として天然記念物に指定されていたが、水害や河川改修により、波佐地区では確認されなくなってしまった。その後、環境DNAによる解析を行ったが、カワシンジュガイのDNAは検出されておらず、同地区のカワシンジュガイは絶滅したと考えられる。しかし、周布川水系もしくは三隅川水系で生息している可能性は否定できない。

存続を脅かす原因

河川改修、土砂の流入、水温上昇、宿主であるサケ科魚類の減少。
(執筆者:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

キセルガイ下目 キセルガイ科

ニシノシマギセル

Stereophaedusa nishinoshimana (Pilsbry, 1909)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

本種の生息地は西ノ島の焼火山,高崎山等が知られていたが、近年西ノ島北端の沖合に浮かぶ星神島からも確認されたが、個体数は多くない。いずれの生息地も個体数は少なく絶滅が危惧される。

概要

比較的小型のキセルガイで、殻高18-20mm、殻径4mm、12-13層。殻の形は紡錘形で殻口は卵形になっており、殻の表面は暗褐色で粗く鋭い線条がある。唇縁は褐色で、幅広く反転し厚い。上板は少し斜位で唇縁に達している。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025)島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況, ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
湊 宏・深谷 治(2021)ニシノシマギセルを星神島から初記録, ホシザキグリーン財団研究報告書, 24: 103-109.
野津 大(1997)ニシノシマギセル, しまねレッドデータブック(動物編): 350-351. 島根県.
野津 大(2004)ニシノシマギセル, 改訂しまねレッドデータブック: 191. 島根県.
戸田顕史(2014)ニシノシマギセル, 改訂しまねレッドデータブック2014: 243. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島西ノ島の固有種であり島内の焼火山、高崎山、国賀海岸など自然豊かな環境に生息している。近年、西ノ島の北東約1.2km沖合の無人島・星神島の生息が報告されている。

存続を脅かす原因

森林の開伐や樹木の伐採, 自然災害による林内や林床の乾燥化など。

特記事項

和名が示すとおり、隠岐(西ノ島)の固有種である。
(執筆者:戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

キセルガイ目 キセルガイ科

ハンジロギセル

Stereophaedusa hemileuca (Pilsbry, 1909)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)



陸・淡水産貝類

選定理由

島根県大田市大江高山がタイプ産地のキセルガイであり、タイプ産地での生息環境の変化で生息数は減少している。本種は安蔵寺山一帯のブナ林にも生息が見られるがきわめて希少である。

概要

貝殻は中型で、殻長17-21mm、殻径は3.8-4.0mmで細長い紡錘形状。螺層は10~11層、螺層の下半部は赤褐色、上半分が白色と完全に色分けされる。

参考文献

増野和幸・川野敬介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査、特に微小種を中心として。ホシザキグリーン財団研究報告書, (21): 108-109.
 増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
 湊 宏(2014) 環境省編 レッドデータブック2014 6 貝類, 136 pp.ぎょうせい.

県内での生息地域・生息環境

大江高山では山麓から頂上まで自然の残る落葉樹林帯で見られる。本種は樹上性で夏季の活動期は広葉樹の古木の樹幹などに匍匐する。

存続を脅かす原因

森林伐採。ブナ等広葉樹の自然林の減少。コレクターによる採集圧。

特記事項

二色に明瞭に染め分けられた美しいキセルガイで和名のハンジロギセルはこれによる。

(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

マイマイ目 オナジマイマイ科

アラハダシロマイマイ

Aegista pergranosa Pilsbry et Hirase, 1908

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

隠岐の西ノ島と島後に生息しており、生息個体数も少ない。

概要

殻径14mmほどで中程度の白色円錐形。周縁には強い角があり、本土に生息する近縁のコウダカシロマイマイと大きく異なる特徴をもつ。周縁下部には広い赤褐色の色帯がある。樹上性であり常緑広葉樹林の林縁を好んで生息している。建物の壁面や遊歩道の手すり等、林内の建造物上を匍匐する個体を見かけることがある。

参考文献

Hirano, T., Kameda, Y. and Chiba, S. (2015) A new species of *Aegista* (Gastropoda: Eupulmonata: Camaenidae) from the Chugoku District, Western Honshu, Japan. *Molluscan Research*, 35(2): 128-138.
 増野和幸・鳥越兼治(2014) キュウシュウシロマイマイ種群とシロマイマイにおける殻形態と軟体部形質の比較。 *Venus*, 72(1-4): 89-108.
 湊 宏(1988) 日本陸産貝類総目録, 294pp. 同刊行会, 白浜.

県内での生息地域・生息環境

隠岐(西ノ島、島後)のごく限られた場所に生息する。

存続を脅かす原因

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による倒木等生息地の乾燥化。

特記事項

西ノ島と島後のごく限られた場所にわずかに生息する。

(執筆者: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

マイマイ下目 オナジマイマイ科

イワミマイマイ

Euhadra awaensis occidentalis Azuma, Tatewaki et Okamura, 1987

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

本種は1987年に県西部津和野町をタイプ産地として記載された大形のマイマイ類である。山口・広島両県に近い安蔵寺山一帯のごく狭い範囲に生息すると考えられる。本種の生息環境保全には十分留意する必要がある。

概要

殻は大型(殻径50mm)、重厚でツクシマイマイ模様を示す。殻口はゆるく曲がった斜位で円味のある三角形。唇縁は淡紫色厚く広く反転する。

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025)中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195. 島根県。
岡村一郎(1997)イワミマイマイ。しまねレッドデータブック(動物編): 400-401. 島根県。
岡村一郎(2004)イワミマイマイ。改訂しまねレッドデータブック: 203. 島根県。

県内での生息地域・生息環境

山口・広島両県に近い安蔵寺山一帯のごく狭い範囲に生息すると考えられる。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

近年、複数個体の生体が採集され生殖器等の知見が得られた。

(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

マイマイ下目 ナンバンマイマイ科

オキビロウドマイマイ

Nipponochloritis okiensis (Pilsbry et Hirase, 1908)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

隠岐固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)



選定理由

隠岐(島後)に生息する陸貝であるが、生息数がきわめて少なく、生息地も限られる。さらに、生息に適した環境が年々減少している。

概要

殻高18-19mm。殻は著しく扁平で、濃い暗褐色である。螺塔部は扁平で中央へわずかに落ち込んでいる。殻表は、やや粗い殻毛茸で覆われている。殻高は斜位で半月に見える。軸心はわずかに広がり、内唇の薄い滑層に連なっている。臍孔は広く深く開いている。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025)島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212。
野津 大(1997)オキビロウドマイマイ。しまねレッドデータブック(動物編): 396-397. 島根県。
野津 大(2004)オキビロウドマイマイ。改訂しまねレッドデータブック: 191. 島根県。
戸田顕史(2014)オキビロウドマイマイ。改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 243. 島根県。

県内での生息地域・生息環境

本種は隠岐諸島内にすむ陸貝の中でも個体数が少なく、特に稀な種である。生息環境は自然林内の湿気が保たれている林内の倒木や転石で確認例が多い。

存続を脅かす原因

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等による生息地の乾燥化。

特記事項

近年、島前(西ノ島、海士)から記録された個体は、殻形態及び生殖器の特徴から本土側に生息域をもつ別種の可能性が高い。

(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

イシガイ目 イシガイ科

カラスガイ

Cristaria plicata plicata (Leach, 1879)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



選定理由

県内での生息分布は東部のみであり、生息地・個体数ともに非常に少ないため。

概要

本州日本海側に分布する大型の二枚貝であり、殻長は最大300mmに達する。殻は黒褐色で、翼状突起の付け根には皺状の構造がみられる。幼貝は翼状突起が顕著にみられるが、成長とともに欠落する。殻の内側は真珠光沢が顕著である。

参考文献

北村淳一・内山りゅう (2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑.171pp.山と溪谷社.東京.
松江市 (1995) 松江の堀川 歴史と自然.
島根県 (2014) 改訂しませッドデータブック 2014 動物編 島根県の絶滅の恐れのある野生生物.島根県環境生活部自然環境課.

県内での生息地域・生息環境

県内では、かつて松江城堀川に多数生息していたが、宍道湖の汽水を通水した際に、多くの個体が移植された。しかし、移植先の池沼では生息を確認できていない。現在確認されている生息地において、再生産は行われているものの、個体数が少なく死殻が目立つ。加えて、ヌートリアによる食害が疑われる殻も多く、今後も生息状況を注視する必要がある。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

イシガイ目 イシガイ科

ササノハガイ

Lanceolaria oxyrhynga (Martens, 1861)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

県内では江の川水系にのみ生息し、確認されている生息地も限定的であるため。

概要

本種は中部以西の本州および四国に分布する淡水生二枚貝である。殻は極端に細長く大型で、殻頂は前方に偏る。殻表には連状の構造が見られ、殻の内面は真珠光沢が顕著である。殻長は最大150mmほどに成長する。主に、河川や湖沼の砂礫底や砂泥底に生息する。春～夏にかけて繁殖を行い、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鱗に寄生する。本種は、しまねレッドデータブックにおいてトンガリササノハガイ(*Lanceolaria grayii*)とされていたが、近年の研究により九州の集団はキュウシュウササノハガイ(*Lanceolaria kihirai* Kondo & Hattori, 2019)、本州と四国の集団はササノハガイと分類されたため、それに準じた。

参考文献

広島県 (2021) 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックひろしま 2021 貝類 (淡水産). 広島県環境県民局自然環境課.
北村淳一・内山りゅう (2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑. 168pp.山と溪谷社.東京.
Kondo, T. and Hattori, A. (2019) A new species of the genus *Lanceolaria* (Bivalvia: Unionidae) from Japan. *Venus*, 78: 27-31.
島根県 (2014) 改訂しませッドデータブック 2014 動物編 島根県の絶滅の恐れのある野生生物.島根県環境生活部自然環境課.

県内での生息地域・生息環境

県内では、過去に浜原ダムの下流側で採取された記録のみであったが、近年になって良好な生息地が確認された。しかしながら、県内において現状確認されているのは江の川水系内の2地点のみであり、個体数も決して多くない。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

イシガイ目 イシガイ科

キタノタガイ

Beringiana gosannensis Sano, Hattori & Kondo in Lopes-Lipe et al. 2020

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):高橋拓大



選定理由

近年になって確認された種で、県内での生息地が限られており、個体数も少ないため。

概要

本種は近年になって分類された種であり、本州の日本海側に分布する。殻は長卵形でふくらみが弱く、殻頂は前方に偏る。殻長は最大100mmほどで、殻の内面は真珠光沢が顕著である。主に湖沼や河川、用水路の砂泥底・泥底に生息する。繁殖は通年行われ、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鰭に寄生する。

参考文献

北村淳一・内山りゅう (2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑: 170pp.山と溪谷社, 東京

Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T. et al. (2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. *Molecular phylogenetics and Evolution*, 146. doi:https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755.

県内での生息地域・生息環境

県内では東部と中部で確認されているが、確実な生息地が現状7ヶ所のみである。主に、斐伊川水系で確認されており、良好な生息地も見つかっている。中部ではドブガイの仲間が多産していたとある河川において、生息環境の急速な悪化により、壊滅的な打撃を受けてしまい、同河川では確認されなくなってしまった。西部での生息状況は不明である。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆者:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

イシガイ目 イシガイ科

カタドブガイ

Buldotskia iwakawai (Suzuki, 1939)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):高橋拓大



選定理由

近年になって確認された種で、県内での生息地が限られており、個体数も非常に少ないため。

概要

本種は近年になって分類された種であり、本州の日本海側および北海道に分布する。殻は長卵形でふくらみが弱く、殻頂は中央に寄り、背縁と腹縁は平行に近い。主に湖沼や河川、用水路の砂泥底・泥底に生息する。繁殖は冬に行われ、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鰭に寄生する。

参考文献

北村淳一・内山りゅう (2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑. 171pp.山と溪谷社, 東京.

Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T. et al. (2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. *Molecular phylogenetics and Evolution*, 146. doi:https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755.

県内での生息地域・生息環境

県内では、主に斐伊川水系と江の川水系で確認されているが、確実な生息地は現状4ヶ所のみである。それらの地点においては繁殖が確認されているが、そのいずれでも個体数は少ない。また、中部では本種を含めたドブガイの仲間が多産していたとある河川において、生息環境の急速な悪化により、壊滅的な打撃を受けてしまい、同河川では確認されなくなってしまった。西部での生息状況は不明である。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆者:高橋 拓大)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤマタニシ目 ゴマガイ科

オキゴマガイ

Diplommatina (Sinca) collarifera okiensis Pilsbry et Hirase, 1908

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

—



陸・淡水産貝類

選定理由

隠岐諸島だけに生息している陸貝であるが、自然林の減少等や森林の乾燥化で生息域が狭められている。

概要

殻径2mm、殻高4mm、7層でゴマガイの仲間としては大きい方である。殻の色は赤みがかった黄褐色で、成体の外観はイブキゴマガイに似ている。国内では隠岐のみに生息している。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志 (2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
野津 大 (1997) オキゴマガイ。しまねレッドデータブック (動編): 378-379. 島根県.
野津 大 (2004) オキゴマガイ。改訂しまねレッドデータブック: 193. 島根県.
戸田顕史 (2014) オキゴマガイ。改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 245. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

隠岐(西ノ島、中ノ島、島後)に生息しているが、島外での生息地は確認されていない。広葉樹林等の林床の石や落ち葉が堆積する湿潤な環境に生息している。

存続を脅かす原因

放牧、倒木、森林伐採、乾燥化。

(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

エゾタマキビ目 ヌマツボ科

ホラアナミジンナ

Moria nipponica (Mori, 1937)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

伊豆半島以西の近畿、四国、山口県、九州に分布するが、近年の調査により島根県西部に新たに生息していることが分かった。県内では西部に限って記録されているが、今後の調査により生息域は広がる可能性がある。本種は殻高1.5mmほどで、山間の小溪流に生息する淡水性巻き貝である。

概要

殻は殻高1.5mm、殻径0.8mmの淡黄色をした半透明の紡錘形である。宮崎肺吸虫の中間宿主として、医学的視点からも各地で生態やほかの動物とのつながりが調べられてきた。微小個体であり、その生息環境が小溪流であることから県内における調査は十分とは言えない。

参考文献

古成 暁・鳥居高明・麻沼 浩・三好 学・石井寛子・大平美波子・海瀬和明・馬場富二夫・久松 奨・早川宗志 (2020) 静岡県のおさび田における底生生物および陸上昆虫類等生物相。東海自然誌, 13: 39-64.
増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・原 大和・高橋拓大 (2025) 島根県西部におけるホラアナミジンナの新たな生息確認。豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書, 17:1-5.
岡藤五郎・初鹿 了 (1979) *Bythinella*属の山口県西部地区における分布状況。日本医事新報, 2891: 31-34.

県内での生息地域・生息環境

県内での記録は県西部の局限された地域に限られている。これは生息環境が、山斜面から流出するわずかな水に浸る小石や落葉の裏側などという特殊な点と関係があるかもしれない。また、条件に合った環境であっても、必ずしも生息しているとは限らない。

存続を脅かす原因

風雨など自然力による生息環境の流失、山林開発や溪流の破壊など。

(執筆者: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

エゾタマキビ目 イツマテガイ科

ヤマメタニシ

Blanfordia integra Pilsbry, 1924

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)



選定理由

イツマテガイ科に属するヤマメタニシは、おもに日本海沿岸地域に見られる微小な陸産貝である。分布は島根県東部より日本海沿岸沿いに秋田県大平山まで点在する。

概要

殻は微小で、殻高4.5mm、殻径は3mm、薄質、高円錐形状で殻色は淡黄緑褐色を呈する。螺層はほぼ5層で、各層は多少膨れ縫合は深い。殻口は卵形で殻口縁は厚くならない。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
 増野和幸・川野啓介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査。ホシザキグリーン財団研究報告書, 21: 108-109.
 増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
 岡村一郎(2004) ヤマメタニシ。改訂しまねレッドデータブック: 198。島根県。

(執筆者: 戸田 顕史)

県内での生息地域・生息環境

本種は樹上でアオキ等の低灌木などの葉裏に付着していることが多い。なお、隠岐諸島の西ノ島町焼火山、島後・大満寺山でも生息が確認されている。生息地はいずれの地域でも個体数はきわめて少なくまれである。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

基準標本産地は松江市枕木山である。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤマタニシ目 ヤマタニシ科

オキムシオイ

Chamalycaeus satsumanus okiensis Kuroda (MS)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

-



選定理由

隠岐(西ノ島、中ノ島、島後)のみに生息している陸産貝であるが、森林の伐採等により生息環境が悪化し、個体数が減少している。

概要

殻径約4mm、殻高約2mm、5層のきわめて微小な陸産貝である。殻は円く扁平で円錐形であり、螺頂は低平である。林下の落ち葉や石の下などに生息する。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
 野津 大(1997) オキムシオイ。しまねレッドデータブック(動物編): 376-377。島根県。
 野津 大(2004) オキムシオイ。改訂しまねレッドデータブック: 193。島根県。
 戸田顕史(2014) オキムシオイ。改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 245。島根県。

(執筆者: 戸田 顕史)

県内での生息地域・生息環境

隠岐(西ノ島、中ノ島、島後)に生息が確認されている。海岸に面した灌木の中や、山地でも広葉樹林下に生息している。林床の落ち葉や石の下などで見かけることが多い。

存続を脅かす原因

放牧、森林の開発、樹木の伐採、倒木による林内や林床の乾燥化など。

特記事項

近年の調査で他地域でも同じ特徴を持つ個体が記録されている。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤマタニシ目 ヤマタニシ科

イトウムシオイ

Chamalycaeus itonis Kuroda, 1943

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):佐々木隆志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)



選定理由

奇抜な形の貝殻を持つムシオイガイの亜種である。本種は岡山県、広島県、山口県の石灰岩地帯と島根県、愛媛県の非石灰岩地帯に分布する稀産種である。県中部や東部からは未記録である。近年、生息環境の変化により生息環境が減少している。

概要

貝殻は微小で殻径4.5mm、殻高2.0mm、低円錐形。呼吸管が出る付近の螺管部が極端にくびれた後、急に膨らんで殻口へ向かう。

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
岡村一郎(1997) イトウムシオイガイ. しまねレッドデータブック(動物編): 354-355. 島根県.
岡村一郎(2004) イトウムシオイガイ. 改訂しまねレッドデータブック: 397. 島根県.
戸田顕史(2014) イトウムシオイガイ. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 249. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

広葉樹林の茂る沢などの腐葉や朽木が堆積した砂礫の多い湿度の保たれたところに生息地する。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

生息環境の変化により徐々に厳しくなっている。

(執筆: 戸田 顕史)

陸・淡水産貝類

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤマタニシ目 ヤマタニシ科

オカムラムシオイ

Cipangocharax okamurai (Azuma, 1980)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

県東部の猿政山が基準標本産地である。猿政山の生息地では、生息環境が悪化しており、絶滅が心配されている。

概要

殻は殻高4.5-4.9mm、殻径2.3-2.5mm、螺層は4.5層、低円錐形状。ムシオイガイ類としてはやや大型で、殻は堅固、殻色は淡黄褐色にうすい桃色、殻形は扁平された蝸牛形、殻口はほとんど円形、その周縁は厚く乳白色で光沢がある。底部は乳白色の滑層が著しく発達して臍孔部をほとんど閉じている。蓋は石灰質で厚く円形。軟体は淡いあめ色である。“ムシオイガイ”という名の由来は殻口近くの体層背部縫合部に横たわる管状のものが「虫」を背負っているように見えるので、ムシオイガイと名がつけられた。

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団, 28: 181-195.
岡村一郎(1997) オカムラムシオイガイ. しまねレッドデータブック(動物編): 352-353. 島根県.
岡村一郎(2004) オカムラムシオイガイ. 改訂しまねレッドデータブック: 198. 島根県.
戸田顕史(2014) オカムラムシオイガイ. 改訂しまねレッドデータブック 2014動物編: 250. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

県東部猿政山周辺と広島県吾妻山、六の原に生息するきわめて限られた地域に生息する稀産種である。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

生息環境の変化により徐々に厳しくなっている。

(執筆: 戸田 顕史)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

サナギガイ目 キセルガイモドキ科

クイロキセルモドキ

Mirus andersonianus (Moellendorff, 1885)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

—



選定理由

本種は本州西部より北海道にかけて分布する。中国山地では落葉樹林帯のブナの植生の多い地域にしか生息していない稀産種である。県西部における生息は、分布の西限として極めて重要である。

概要

殻は中小型で、殻高は21mm前後、殻径は8mm前後、7.5—8層で、殻色は濃いブドウ酒色がかった栗褐色である。口唇は白く殻口内は紫色である。中国山地では脊梁山脈のブナ林帯のブナの樹幹に生息する稀産種である。夏季にはブナ樹のかなり上部まで登っている。

参考文献

増野和幸・川野敬介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査、特に微小種を中心として、ホシザキグリーン財団研究報告書、21: 108-109。
 増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況、ホシザキグリーン財団研究報告、28: 181-195。
 岡村一郎(1997) クイロキセルガイモドキ、しまねレッドデータブック(動物編): 350-351、島根県。
 岡村一郎(2004) クイロキセルガイモドキ、改訂しまねレッドデータブック: 199、島根県。
 戸田顕史(2014) クイロキセルガイモドキ、改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 251、島根県。

県内での生息地域・生息環境

県内では船通山、大万木山、三瓶山、鷹ノ巣山、奥匹見峡、安蔵寺山などのブナ林帯に生息している。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

県西部は、分布の西限として極めて重要である。

(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キセルガイ目 キセルガイ科

ホソヒメギセル

Megalophaedusa gracilispira (Moellendorff, 1882)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

基準標本産地を“神戸”とする殻高10mm前後の小さなキセルガイ類。近畿・中国・四国・九州北部に分布するが、各地とも個体数は少ない。山地性で大木の根元や朽ち木の裏に生息する。殻は淡褐～黄白色で、比較的薄質、細長く紡錘形。

概要

殻高8.0—10.0mm、殻径2.0—2.4mmで貝殻は小形。殻口はやや傾いて洋梨形、唇縁は反曲しわずかに螺層から突き出る。下軸板は唇縁に達しない。主翼は長く、殻周のおよそ2/3。上・下腔壁の間に小さな腔壁のあることが特徴。

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況、ホシザキグリーン財団研究報告、28: 181-195。
 湊 宏(1994) 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究、Venus、別巻2、211pp。

県内での生息地域・生息環境

県内の生息は中国山地西部の安蔵寺山と益田市匹見町三葛の2カ所のみである。生息の発見には広葉樹の根元などの落葉下、樹洞、朽ち木の裏側などの精査を要する。

存続を脅かす原因

森林の開発や樹木の伐採などによる林内や林床の乾燥化、堆積土の攪乱など。

(執筆者: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キセルガイ下目 キセルガイ科

ヒメナミギセル

Stereophaedusa ultima (Pilsbry, 1909)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

隠岐(島後)の中村から記録された種で、近年、中ノ島でも生息が確認された。主な生息地では、大木の伐採や台風による倒木等で、個体数の減少が著しい。

概要

殻高27-29mm、殻径5.3-5.5mm、紡錘形状で褐色から紫褐色を呈するが、縫合の下は白く、光沢が強い。

参考文献

深谷 治 (2018) 隠岐諸島・中ノ島で初記録のヒメナミギセル. 島根県立三瓶自然館研究報告, 16: 35-36.
 増野和幸・福田貴之・白石泰志 (2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
 野津 大 (1997) ヒメナミギセル. しまねレッドデータブック(動物編): 386-387. 島根県.
 野津 大 (2004) ヒメナミギセル. 改訂しまねレッドデータブック: 194. 島根県.
 戸田顕史 (2014) ヒメナミギセル. 改訂しまねレッドデータブック2014: 246. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

島後に生息することが知られていたが、深谷(2018)により中ノ島にも生息することが明らかになった。

存続を脅かす原因

放牧、森林の開発、樹木の伐採、倒木による林内や林床の乾燥化など。

特記事項

模式標本産地は隠岐の島町中村で、本土産のナミギセルに比べてより細長く、縫合の下は白く、成長脈には光沢があり細かいことが特徴。
(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キセルガイ下目 キセルガイ科

モリヤギセル

Stereophaedusa moriyai (Kuroda et Iw. Taki, 1944)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

準絶滅危惧(NT)



選定理由

本種は広島県東部の比婆郡口和町を基準標本産地として、1944年に黒田、滝岡博士によって記載された。記載時はわずか数個体を得たのみで、原記載文にも「今後他の個体を得て本稿のつくさざる点を補足したい」と記されているほど当時は稀産であった。県内においても山間地において採集されるが、個体数は少なく稀産種である。

概要

貝殻は中型で、殻高は32mm、殻径7.8mm、12(1/3)層。紡錘形で螺頂部は鈍く、次体層はもっとも広い。殻口は洋梨形で唇縁は全縁で白色。その唇縁はひろがり反転する。殻色は黄褐色。

参考文献

増野和幸・川野敬介 (2018) 島根県における陸産貝類の生息調査、特に微小種を中心として. ホシザキグリーン財団研究報告書, 21: 108-109.
 増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和 (2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
 岡村一郎 (1997) モリヤギセル. しまねレッドデータブック(動物編): 358-359. 島根県.
 岡村一郎 (2004) モリヤギセル. 改訂しまねレッドデータブック: 200. 島根県.
 戸田顕史 (2014) モリヤギセル. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 252. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

本種は県東部より県西部の山地の古木・倒木に生息するが、近年生息数が少なくなっている。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

和名のモリヤギセルは当時広島師範学校教諭をしていた守屋勝太郎氏が採集したことによる。
(執筆者: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キセルガイ目 キセルガイ科

シイボルトコギセル

Reinia sieboldtii (L. Pfeiffer, 1848)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):増野和幸



選定理由

本種は九州全域及び四国西部と中国西部(山口県)に広く分布するキセルガイで、温暖海流の影響を受ける地域に分布するといわれている。島根県内においては稀産種である。

概要

貝殻は中型で、殻長18mm前後、殻径は4mm前後、螺層は10層で殻色は黄褐色か暗黄褐色。殻口は卵形で、唇縁は全縁で白く厚く広がり反転する。

参考文献

増野和幸・川野敬介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査、特に微小種を中心として、ホシザキグリーン財団研究報告書、(21): 108-109。
 増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況、ホシザキグリーン財団研究報告、28: 181-195。
 湊 宏・矢野重文・中島良典(2015) 高島(島根県益田市)の陸産貝類相と山口県萩沖の離島との比較、南紀生物、57(1): 28-34。
 大畑純二(2005) 益田市高島の動物調査雑記、島根県立三瓶自然館研究報告、3: 77-78。
 岡村一郎(1997) シイボルトコギセル、しまねレッドデータブック(動物編): 366-367、島根県。
 岡村一郎(2004) シイボルトコギセル、改訂しまねレッドデータブック: 201、島根県。

県内での生息地域・生息環境

本種の県内生息地は県東部と隠岐(西ノ島、中ノ島)においてのみ記録があったが、近年、県西部・益田市沖に浮かぶ高島で生息が確認された。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

益田市沖合の高島にも分布。

(執筆: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

マイマイ目(柄眼目) キセルガイ科

カワモトギセル

Tyrannophaedusa kawamotoi Kuroda et Takai, 1944

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):増野和幸



選定理由

県内では県西部の益田市、鹿足郡の山間地域の広葉樹林帯に生息が見られる稀産種である。山地の古木・倒木に生息するが、近年生息数が少なくなっている。

概要

貝殻は中型で、殻高は19-24mm、殻径は4.5-5mm、紡錘形状を呈し、重厚、堅固である。螺層は11-12層。殻表には微細な成長脈が認められる。角白色の光沢を有する。殻口はわずかに突き出て、斜位。唇縁は全縁ひろがり反転し白色の滑層がある。

参考文献

岡村一郎(1997) カワモトギセル、しまねレッドデータブック(動物編): 380-381、島根県。
 岡村一郎(2004) カワモトギセル、改訂しまねレッドデータブック: 200、島根県。
 戸田顕史(2014) カワモトギセル、改訂しまねレッドデータブック2014動物: 252、島根県。

県内での生息地域・生息環境

本種の県内での生息地は、県西部の益田市(旧・匹見町)と津和野町(旧:日原町)、吉賀町(旧:六日市町;旧:柿木村)の山間地に生息している。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

和名のカワモトギセルは、採集者である河本卓氏に献名されたものである。

(執筆: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キセルガイ目 キセルガイ科

トサギセル

Stereophaedusa tosana (Pilsbry, 1901)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

高知県四万十市(旧中村市)を基準標本産地とする殻高15mm前後の小形のキセルガイ類。四国・九州中部・中国地方西部に生息するが、生息密度が小さく、個体数は各地ともきわめて少ない。中国地方では島根県安蔵寺山、山口県寂地山など数カ所に限る。山地性で天然林内の倒木や朽ち木の裏側などに生息する。殻は淡褐色で、細長い紡錘形。

概要

殻高11.0—16.0mm、殻径2.5—3.5mmで貝殻は小形。殻口は小さい洋梨形で螺層から突き出る。唇縁はわずかに反曲する。上板は小さく、下板は見えにくい。主襞は長い。上腔襞と下腔襞の間に1~2個の腔襞があるが、その数は変異が大きい。生息地では森林内の大木の根元で、複数個体が集合して生息していた。

参考文献

湊 宏・多田 昭(2008) 西日本におけるトサギセル種群2型の分類学的位置について. 南紀生物, 50(2): 240-246.
土田英治・藤原廣治・金井照夫(1978) 山口県寂地山の陸貝. ちりばたん, 10(3): 70-72.

県内での生息地域・生息環境

県内での生息は中国山地西部の安蔵寺山および津和野町での2カ所のみである。生息環境は森林の朽ち木や倒木の下、古木の根元・落葉下などで、生息数は極めて少ない。

存続を脅かす原因

森林の開発や樹木の伐採による林内や林床の乾燥化など。

(執筆者: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウラナメクジ目 シタラ科

オキノクニキビガイ

Trachchlamys okiensis (Pilsbry et Y. Hirase, 1908)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



選定理由

隠岐(島後)だけに生息するとされたが、西ノ島町でも記録されており、各地とも個体数はきわめて少ない。

概要

殻径が3.6mm、殻高が2.7mm、6—7層で臍孔をもち周縁に弱い竜骨状の角をもつ。殻は薄い半透明で黄褐色から褐色で光沢がある。

県内での生息地域・生息環境

本種は隠岐をタイプ産地として記載された微小貝で、個体数の少ない種である。広葉樹林内の湿潤な場所を好み、落ち葉、倒木、石の下に生息している。

存続を脅かす原因

森林の開発や樹木の伐採による林内や林床の乾燥化など。

特記事項

隠岐の島町中村(旧西郷町)をタイプ産地として記載された微小種。近年、島外からも記録されている。

(執筆者: 増野 和幸)

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
野津 大(1997) オキノクニキビ. しまねレッドデータブック(動物編): 390-391. 島根県.
野津 大(2004) オキノクニキビ. 改訂しまねレッドデータブック: 195. 島根県.
戸田顕史(2014) オキノクニキビ. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 246. 島根県.

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

マイマイ下目 オナジマイマイ科

ダイセンニシキマイマイ

Euhadra sandai daisenica Kuroda, 1931

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):増野和幸



選定理由

本種は島根県の脊梁をなす中国山地の広葉樹林のブナ林帯に生息する大型の陸産貝である。県内の分布は限られた地域にのみ生息しているもので稀産である。

概要

殻は大型強固である。殻径は40mm前後、殻高は30mm前後、螺層は6.5層。螺塔はやや扁平した円錐形である。殻色は黄褐色から黒褐色で、淡黄色の火炎彩模様が斑状に美しく現れる。色帯はツクシマイマイ模様である。殻口は斜めで、周縁は幅広く円く広がり反転している。臍孔は狭く深い。

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
 岡村一郎(1997) ダイセンニシキマイマイ. しまねレッドデータブック(動物編): 374-375. 島根県.
 岡村一郎(2004) ダイセンニシキマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック: 202. 島根県.
 戸田顕史(2014) ダイセンニシキマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 254. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

県内の分布は県東部の船通山より県西部の安蔵寺山まで広い範囲に及びが限られた地域にのみ生息している。個体数は少なく稀産種である。

存続を脅かす原因

森林伐採。

特記事項

軟体部は背面中央に黒く幅の広い縦条があるが、縦条をもたない個体も生息する。

(執筆: 戸田 顕史)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

マイマイ上目 オナジマイマイ科

オキニシキマイマイ

Euhadra sandai oki Pilsbry, 1928

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):増野和幸



選定理由

隠岐(島後)にのみ生息する陸産貝で、近年の自然環境の変化で個体数は激減している。また、殻の美しい大型の陸産貝であり、保護対策が必要である。

概要

殻高27mm、殻径43mm、殻が6層の個体が多い。殻は黒褐色であるが、色帯はツクシマイマイそっくりの模様がある。殻は偏圧されない形で、明るい黄色の条が顕著に現れ美しい色彩で、軟体部は背面中央に太い黒縦条があり、よく目立つ。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
 野津 大(1997) オキニシキマイマイ. しまねレッドデータブック(動物編): 398-399. 島根県.
 野津 大(2004) オキニシキマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック: 196. 島根県.
 戸田顕史(2014) オキニシキマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 247. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

島後のみにもみられ、常緑広葉樹が茂る森林に生息する。神社の境内や深山で見かけることが多い。

存続を脅かす原因

放牧、森林の開発、樹木の伐採による林内や林床の乾燥化など。

特記事項

類似種としてダイセンニシキマイマイなどがあり、コガネマイマイの仲間に近い陸産貝である。

(執筆: 増野 和幸)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

マイマイ上目 ナンバンマイマイ科

オキシメクチマイマイ

Satsuma okiensis (Pilsbry et Y. Hirase, 1908)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



陸・淡水産貝類

選定理由

隠岐諸島に生息する固有の陸貝であるが、森林の環境変化により、山地の広葉樹林の減少で生息数が減少している。

概要

殻高17mm前後の中型で、栗褐色。体層周縁に淡い黄褐色の帯をめぐらす。広葉樹林等の林内で落ち葉や転石が多く湿度が高い環境に生息する。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
野津 大(1997) オキシメクチマイマイ.しまねレッドデータブック(動物編): 394-395. 島根県.
野津 大(2004) オキシメクチマイマイ.改訂しまねレッドデータブック: 195. 島根県.
戸田顕史(2014) オキシメクチマイマイ.改訂しまねレッドデータブック2014: 247. 島根県.

(執筆: 戸田 顕史)

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島の常緑広葉樹が茂る森林の林床で確認されるが、個体数は少ない。

存続を脅かす原因

放牧、森林の開発、樹木の伐採による林内や林床の乾燥化など。

特記事項

隠岐諸島に生息する固有の陸貝。

準絶滅危惧 (NT)

イシガイ目 イシガイ科

マツカサガイ(広域分布種)

Pronodularia cf. japonensis 1 (Lea, 1859)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

県内の生息地は小河川に限定され、生息数も少ないため。

概要

殻は卵円形で、膨らみは弱く平たい。殻長は最大90mmに達する。殻の表面には、逆V字型の模様が顕著であるが、成長につれて腹縁近くの模様が消失し、平滑となる。後背縁の放射状の模様は顕著である。小川や用水路の砂礫から砂泥底に生息する。2年で性成熟し、繁殖期は初夏から夏である。

参考文献

北村淳一・内山りゅう(2020) 日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑.168pp.山と溪谷社.東京.
近藤高貴(2020) イシガイ科貝類の新たな分類体系.ちりぼたん.50: 294-296
増野和幸・川野敬介(2019) 島根県における淡水産貝類生息調査.ホシザキグリーン財団. (19): 131-150.

県内での生息地域・生息環境

県内では、東部および西部の小河川や用水路で確認されており、新たな生息地も複数みつかっている。しかしながら、いずれの生息地でも生息数は決して多くない。中部での生息状況は不明である。また、近年の研究により、マツカサガイには「広域分布種」・「東海固有種」・「北東本州固有種」の3系統が認められており、県内に生息するものは「広域分布種」とされている。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆: 高橋 拓大)

準絶滅危惧 (NT)

アマオブネ目 ユキズメ科

ミヤコドリ

Phenacolepas pulchella (Lischke, 1871)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 戸田顕史

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

本種は汽水域のはまり石の裏等の還元環境というごく限られた環境に生息するため、全国的にも絶滅が危惧される。

概要

殻長8—10mm程度の長楕円形で、ふくらみの強い傘形の小型貝である。

県内での生息地域・生息環境

県内では中海東部のはまり石の裏等、還元環境に付着する。他の地域で報告はない。

存続を脅かす原因

埋め立て、水質悪化。

特記事項

還元環境に生息。

(執筆者: 戸田 顕史)

参考文献

福田 宏 (2014) .ミヤコドリ.環境省編 レッドデータブック2014 6貝類: 417. ぎょうせい.
増田 修・内山りゅう (2004) .ミヤコドリ.「日本産淡水貝類図鑑」.ピーシーズ生態写真図鑑シリーズ2.

準絶滅危惧 (NT)

ヤマタニシ目 アズキガイ科

アズキガイ

Pupinella rufa (A. Adams et Sowerby, 1864)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内のアズキガイの記録は少ない。本種は自然分布とともに、他県では物流に伴う市街地周囲での生息も見られる。

概要

殻の殻高は10mm前後、殻径は5mm前後、螺層は5—6層位の小型の陸産貝である。殻は厚く堅固で殻色は深紅色をしているのでこの名がある。殻口は垂直的で円く、口縁には1対の深い溝状の切れ込みがある。蓋はうすい革角質で円い。臍孔は軸唇に覆われて殆ど閉じる。

参考文献

増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和 (2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
岡村一部 (1997) アズキガイ.しまねレッドデータブック (動物編): 350-351. 島根県.
岡村一部 (2004) アズキガイ.改訂しまねレッドデータブック: 197. 島根県.
戸田顕史 (2014) アズキガイ.改訂しまねレッドデータブック2014: 249. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

本県の生息は山地であり自然分布と考えられる。アズキガイは、本州(中部以西)から四国、九州にわたって、広い範囲に分布生息する陸産貝である。分布範囲は広いが、生息地が限定されている。中国地方の場合、山陽側の生息地は点在しているが山陰側はきわめて少ない。県内では西部の益田市のみで稀産種である。

存続を脅かす原因

広葉樹林等生息地の保護維持を図ることが必要である。

(執筆者: 増野 和幸)

準絶滅危惧 (NT)

エゾタマキビ目 カワザンショウ科

ムシヤドリカワザンショウ

Assiminea parasitologica (Kuroda, 1958)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 戸田 顕史

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



陸・淡水産貝類

選定理由

本種はヨシ原内部の植物の根元等という限られた環境に生息する。全国的にも絶滅が危惧する種であり、福田(2000)はヨシ原の状態が悪化した時に最初にいなくなる種としている。

概要

殻高4-5mm、殻径3-4mmで殻色は黄褐色から赤褐色。殻頂部に虫食い模様のある浸食痕があることが名前の由来。本州、四国、九州にかけてのヨシの生育する汽水域に生息する。

参考文献

福田 宏(2000) .カワザンショウ類,有明海の生きものたち: 124-125,佐藤正典編,海游舎.
福田 宏(2000) .干潟・河口域の巻貝類と生息環境,佐藤正典編,有明海の生きものたち: 132-133,海游舎.
増田 修・内山りゅう(2004) .ムシヤドリカワザンショウ, ピーシーズ生態写真図鑑シリーズ2 日本産淡水貝類図鑑: 106, ピーシーズ.

(執筆: 戸田 顕史)

県内での生息地域・生息環境

汽水域のヨシ原内部の植物の根元や流木の下等に生息し、宍道湖、大橋川、中海では多く見られるが、他の地域では稀である。

存続を脅かす原因

埋め立て、水質悪化。

特記事項

殻上部の虫食い模様の浸食痕が名前の由来。

準絶滅危惧 (NT)

エゾタマキビ目 カワザンショウ科

ヨシダカワザンショウ

Angustassiminea yoshidayukioi (Kuroda, 1959)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

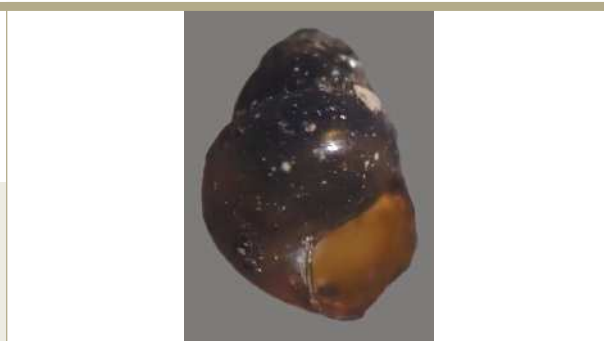
撮影者(提供者): 佐々木隆志

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本種は河川河口(汽水域)のヨシ原に隣接する草むらなどに生息し、他のカワザンショウ科の種に比べて記録例が少ない。

概要

殻高3mm前後で殻色は黄褐色から赤褐色。螺層のふくらみが強く外観は丸みがある。東京湾から九州にかけて生息する。

参考文献

福田 宏(2000) .カワザンショウ類,佐藤正典編,有明海の生きものたち: 125-126,海游舎.
福田 宏(2000) .干潟・河口域の巻貝類と生息環境,佐藤正典編,有明海の生きものたち: 132-133,海游舎.
福田 宏(2014) .ヨシダカワザンショウ, 環境省編レッドデータブック2014 貝類: 419,ぎょうせい.
増田 修・内山りゅう(2004) .ヨシダカワザンショウ, ピーシーズ生態写真図鑑シリーズ2 日本産淡水貝類図鑑: 105, ピーシーズ.

県内での生息地域・生息環境

県内では斐伊川水系大橋川、中海の他、近年、佐々木により益田で確認された。いずれも汽水域の植物の根元や流木の下で確認される。

存続を脅かす原因

海岸開発、湿地開発。

特記事項

潮上帯に生息。

(執筆: 戸田 顕史)

準絶滅危惧 (NT)

エゾタマキビ目 ミズゴマツボ科

ミズゴマツボ

Stenothyra japonica Kuroda, 1962

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

島根県におけるミズゴマツボの出現を確認した記録は、これまでにわずか数例しかなく、生息地が局所的である。

概要

殻高4mm、殻幅2mm程度。微小な巻貝で、淡水域または海水の影響のある汽水域に棲息する。主として、低塩分で流れのない水域の泥上という特殊な環境に生息する。本種は、岩手から鹿児島までの11府県で生息していることが記録されている。

参考文献

福田宏 (2000) ミズゴマツボ類。佐藤正典編 有明海の生きものたち: 6-127.海游舎。
福田宏 (2014) ミズゴマツボ。環境省編 レッドデータブック2014 貝類: 417。
増野和幸・川野敬介 (2019) 島根県における淡水産貝類生息調査。ホシザキグリーン財団研究報告, 22: 131-150。
戸田顕史・馬堀望美・福田宏・品川明 (2003) 宍道湖におけるミズゴマツボの出現と分布。ホシザキグリーン財団研究報告, 6: 59-63。

県内での生息地域・生息環境

県東部では宍道湖および中海の流入河川河口部や水路に生息するほか、県中部にも生息する。

存続を脅かす原因

埋め立て、水質悪化。

(執筆: 戸田 顕史)

準絶滅危惧 (NT)

モノアラガイ目 ヒラマキ科

レンズヒラマキ (クルマヒラマキ)

Hippeutis cantori (Benson, 1850)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

本種は水田や溜池等に生息し、生息地は限られる。近年のため池等の埋め立てにより生息地が減少している。

概要

大阪以西の本州、四国、九州、沖縄の河川のワンドや池沼に生息する。殻は円盤状平巻形をし、ヒラマキガイとよく似ている。本種は螺層がわずかに凹み、体層の周縁に著しい角があり、下面は極めて平らであり、まさにレンズのようである。成貝は殻径5-7mmで最大10mmを超えるものもある。

参考文献

紀平肇・松田征也・内山りゅう (2003) クルマヒラマキガイ。日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類。ピースーズ生態写真図鑑シリーズ1: 57。
増野和幸・川野敬介 (2019) 島根県における淡水産貝類生息調査。ホシザキグリーン財団研究報告, 22: 139-140。
中井克樹 (2014) クルマヒラマキガイ (レンズヒラマキガイ)。環境省編 レッドデータブック2014 6 貝類: 310. ぎょうせい。

県内での生息地域・生息環境

県内での記録は県東部、西部および隠岐に分布し、県東部の記録が多いが、生息地は限られている。条件に合った環境では多数みられるが、ある溜池では全域で生息することはなく、河川流入口付近の水際の植物に多数付着していた。

存続を脅かす原因

農薬、埋め立てなど。

特記事項

近似種または同種とみなされる種はアジア地域に広く分布。

(執筆: 戸田 顕史)

準絶滅危惧 (NT)

マイマイ下目 オナジマイマイ科

チョウシュウシロマイマイ

Aegista hirosifukudai Hirano, Kameda et Chiba, 2015

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

島根県西部を含む中国地方西部、瀬戸内海島嶼部、愛媛県北部に分布。基準標本産地は山口県中部。殻高15mmほどの円錐形をし、草本類や低木の葉上・樹幹などで観察される樹上性の貝。島根県益田市付近に近縁種・コウダカシロマイマイとの生息境界があると考えられている。

概要

殻高15mm、殻径17mmの灰白色に、周縁下部にやや幅の広い赤褐色の色帯のある比較的堅牢な殻をもつ。多くが色帯をもつが、局所的に殻全体が白色・無帯の個体がある。2015年に新種記載された。長い間、鳥取県伯耆地方を基準標本産地とするコウダカシロマイマイや、北九州市門司を基準標本産地とするキュウシュウシロマイマイと同一視されてきた。殻形態・軟体部形質、および遺伝子分析により別種として記載された。一見するとサンインマイマイを小さくしたように見えるが、並べて比較すると差異は明瞭である。

参考文献

Hirano, T., Kameda, Y. and Chiba, S. (2015) A new species of *Aegista* (Gastropoda: Eupulmonata: Camaenidae) from the Chugoku District, Western Honshu, Japan. *Molluscan Research*, 35(2): 128-138.
増野和幸・鳥越兼治 (2014) キュウシュウシロマイマイ種群とシロマイマイにおける殻形態と軟体部形質の比較. *Venus*, 72(1-4): 89-108.
湊 宏 (1988) 日本陸産貝類総目録. 294pp. 同刊行会. 白浜.

県内での生息地域・生息環境

県内では県西部・益田市付近に分布の東限があると考えられており、島根県西部から中国山地を横断し広島県中・東部にかけて生息する。広葉樹の低木や草本類の葉上、樹幹・枝などで観察される。里山の竹林と雑木林が混交した林内でも見ることができるとは言えるが個体数は多くない。

存続を脅かす原因

森林の開発や樹木の伐採などによる林内や林床の乾燥など。
(執筆者: 増野 和幸)

準絶滅危惧 (NT)

コウラナメクジ下目 シタラ科

カサネシタラ

Sitalina insignis (Pilsbry et Y. Hirase, 1904)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

本州(関東以西)・四国・九州に分布するとされ、各地に点々と生息するが、その個体数はきわめて少ない。中国地方では山口・鳥取県以外に岡山県での記録がある。近年の調査により島根県内では、中国山地で数カ所記録された。その産地は局限され生息数もきわめて少ない。

概要

殻高1.5mm、殻径2.0mmほどの微小貝である。殻は薄質で、各螺層の縫合が深く、側面が階段状になる。周縁角が鋭く竜骨(キール)状になる。殻は淡褐色で光沢はない。表面に細く弱い螺旋状脈が見られる。臍孔はわずかに開きすき間状。

参考文献

増野和幸 (2025) 山口県で記録されたサヤマトガイとカサネシタラガイ. 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書, 17: 55-57.
岡山県環境文化自然環境課 (2020) 岡山県レッドデータブック 2020 動物編 7 軟体動物.
大垣内宏 (1971) カサネシタラガイの新産地. *ちりぼたん*, 6(5): 113-114.
宇野 明 (2006) 鳥取県におけるカサネシタラガイの記録. *山陰自然史研究*, 2: 34. 鳥取県生物学会.

県内での生息地域・生息環境

県内での生息は中国山地のブナ林などの林床で、やや乾燥した落葉中にみられる。林床のリターを篩を通して集め、その落葉中から顕微鏡下でピンセットを使って採集するほど、きわめて微小であり生体の観察や採集がむずかしい。

存続を脅かす原因

森林の伐採・開発などによる林床の攪乱、豪雨などの土壌流失による生息地の荒廃。
(執筆者: 増野 和幸)

準絶滅危惧 (NT)

マイマイ下目 オナジマイマイ科

オキマイマイ

Euhadra dixoni okicola Pilsbry, 1927

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

隠岐諸島に生息するサンインマイマイの矮小型とされる。このことから、隔離による環境条件の差異と生物進化を考える上で貴重な種といえる。

概要

殻高18.8-20mmで、殻径は18.5-24.5mm、5-6層になっている。殻口はやや下降しており斜位であり卵形に近い。周縁は薄く大きく広く反転しており、臍孔は狭いながら存在する。軟体は色帯の無帯型では乳白色であり、頭瘤のみ暗黒色となっている。触角はやや褐色に近い。隠岐(島前)の個体には殻の有帯のものが多く、島後では大部分が殻の色は黄色がかったクリーム色で無帯の個体である。比較的明るい広葉樹林を好んで生息し、樹木の幹や葉などで見かけることが多い。

参考文献

増野和幸・福田貴之・白石泰志(2025) 島根県隠岐諸島における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 197-212.
野津 大(1997) オキマイマイ. しまねレッドデータブック(動物編): 402-403. 島根県.
野津 大(2004) オキマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック: 196. 島根県.
戸田顕史(2014) オキマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 248. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

分布域は隠岐諸島内全域に生息している。樹上性で比較的見る機会が多い。

存続を脅かす原因

樹木の伐採による林内や林床の乾燥化など。

(執筆者: 戸田 顕史)

情報不足 (DD)

ヤマタニシ目 ヤマタニシ科

ヤマクルマ

Spirostoma japonicum japonicum (A. Adams, 1867)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

ヤマクルマは、本州の近畿以西から、四国、九州にわたって、広い地域に分布する陸産貝である。しかし中国地方においては、山陽側では分布域の広い陸産貝であるが、山陰側では分布が少なく、県西部の限られた地域にしか見られない。

概要

殻は殻径14mm前後と比較的小さく、扁平状である。螺層はほとんど高まらない。臍孔は広く深い。殻口はやや斜めで肥厚し反転する。殻色は黄褐色である。蓋は高い円錐形で中空、角質の螺旋板をもつ、とんがり帽子様になる。活動している時、体の近くにある蓋は殻の臍孔の空いた所に入れている。

参考文献

増野和幸・川野敬介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査、特に微小種を中心として. ホシザキグリーン財団研究報告書, (21): 108-109.
増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
岡村一郎(1997) ヤマクルマガイ. しまねレッドデータブック(動物編): 348-349. 島根県.
岡村一郎(2004) ヤマクルマガイ. 改訂しまねレッドデータブック: 197. 島根県.
戸田顕史(2014) ヤマクルマガイ. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 249. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

県西部の益田市や津和野町などで、広葉樹林の林床落葉下に生息するが、確認情報が少ない。

存続を脅かす原因

森林の開発、樹木の伐採による乾燥化など。

(執筆者: 増野 和幸)

情報不足 (DD)

イシガイ目 イシガイ科

イシガイ

Nodularia douglasiae (Gray in Griffith et Pidgeon, 1833)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

-



選定理由

イシガイ類の中では比較的多くみられるが、生息環境の悪化による生息地・個体数の減少が著しく、今後検討を要する種であるため。

概要

本種は、北陸・近畿以西に広く分布する淡水生二枚貝である。殻はやや細長い長卵形で黒色、殻長は最大90mmほどで殻の内面は真珠光沢が顕著である。若齢個体は、黄緑色を帯びる傾向にあり、殻長周辺の彫刻が顕著にみられる。主に、湖沼や河川、用水路などの砂礫底や砂泥底、泥底に生息する。春～夏にかけて繁殖を行い、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鱗に寄生する。

参考文献

北村淳一・内山りゅう(2020)日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑。169pp.山と溪谷社.東京.
増野和幸・川野敬介(2019)島根県における淡水産貝類生息調査.ホシザキグリーン財団。(19):131-150.

県内での生息地域・生息環境

県内においては、斐伊川水系と江の川水系で確認されており、特に斐伊川水系では他のイシガイ科二枚貝と比較して多くの個体を確認することができる。しかしながら、生息環境の悪化により各所で減少傾向が見られ、中には姿を消してしまった場所もあり、県内における本種の生息状況を速やかに把握する必要がある。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆者:高橋 拓大)

情報不足 (DD)

イシガイ目 イシガイ科

カタハガイ

Obovalis omiensis (Heimburg, 1884)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

現状確認されているのが死殻のみであり、更なる調査・検討を要するため。

概要

本種は、東海・北陸以西に広く分布する淡水生二枚貝である。殻は長卵形で黒色、前方から後方にかけて幅広になり、後背縁には連状の彫刻が見られる。殻長は最大100mmほどで殻の内面は真珠光沢が顕著である。主に、湖沼や河川、用水路などの砂礫底や砂泥底に生息する。早春に繁殖を行い、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鱗に寄生する。

参考文献

広島県(2021)広島県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックひるしま 2021 貝類(淡水産)。広島県環境県民局自然環境課。
北村淳一・内山りゅう(2020)日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑。168pp.山と溪谷社.東京。

県内での生息地域・生息環境

本種は以前から江の川水系の広島県側では記録されているが、県内においては、江の川水系にて2個体分の死殻が確認されているのみである。以降は新たな殻および生貝は確認されていないため、生息数は極めて少ないと推測される。今後も更なる調査が望まれる。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆者:高橋 拓大)

情報不足 (DD)

イシガイ目 イシガイ科

ヌマガイ

Shinanodonta lauta (Martens, 1877)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):高橋拓大

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

-



選定理由

生息環境の悪化により生息地・個体数の減少が著しく、今後検討を要する種である。

概要

本種は、国内に広く分布する淡水生二枚貝である。殻は卵形でふくらみが強く、殻長は最大200mmほどと大型になる。殻の内面は真珠光沢が顕著である。主に湖沼や河川、用水路の砂泥底・泥底に生息する。春～夏にかけて繁殖を行い、幼生は主にヨシノボリ類やオイカワなどの魚類の鰓や鱗に寄生する。

参考文献

北村淳一・内山りゅう(2020)「日本のタナゴ 生態・保全・文化と図鑑」:170pp.山と溪谷社.東京
近藤高貴・田部雅昭・福原修一(2006)ドブガイに見られる遺伝的2型のグロキディウム幼生の形態。Venus. 65: 241-245.

県内での生息地域・生息環境

県内では東部から西部の広い範囲で確認されているが、各所で河川改修などに起因する生息環境の悪化により減少傾向が著しい。かつては生息地・個体数ともに数多く確認されていた斐伊川水系では、河川改修やヌートリアによる食害などにより減少傾向にある。中部では本種を含めたドブガイの仲間が多産する河川では、生息環境の急速な悪化や河川改修等で壊滅的な打撃を受け、2022年に4個体確認されて以降、未確認。西部においても、生息地・生息数が非常に少ない。

存続を脅かす原因

水質汚濁、洪水などによる生息域の消失・土砂の堆積、濁水、河川改修、幼生宿主となる魚類の減少、ヌートリアによる食害。

(執筆者:高橋 拓大)

情報不足 (DD)

マルスダレ目 シジミ科

マシジミ

Corbicula leana (Prime, 1864)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

本種は河川、水路、溜池などの純淡水域に生息しているが、外来のタイワンシジミ種群の侵入により競争的に置換され、全国で絶滅危惧種または準絶滅危惧種に指定される。

概要

東北から九州、四国の河川等に生息し、殻長30mm程度の亜三角形で、殻表面の成長脈は粗い。殻色は黄褐色から黒紫色を呈し光沢はほとんどない。雌雄同体の卵胎生で、体内受精を行い、鰓葉内で違いになるまで保育する。繁殖期は主に4月～10月。

参考文献

紀平肇・松田征也・内山リゅう(2003) マシジミ, 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, ピーシーズ生態写真図鑑シリーズ1: 118-121.
増野和幸・川野敬介(2019) 島根県における淡水産貝類生息調査, ホシザキグリーン財団研究報告, 22: 142.
中井克樹(2014) マシジミ, 環境省編 レッドデータブック2014 6 貝類: 399.ぎょうせい.

県内での生息地域・生息環境

県内では全域に生息するが、生息地は限られる。生息情報が少ない。

存続を脅かす原因

圃場整備、河川開発、河川改修、タイワンシジミ種群の加入、交雑。
(執筆者: 戸田 顕史)

情報不足 (DD)

キセルガイ下目 キセルガイ科

ヒメコギセル

Taupaedusa comes (Pilsbry, 1900)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

本種はPilsbry氏が1900年兵庫県揖保郡新宮町篠首を基準標本産地として記載されたものである。県内では県東部の限られた地域に生息しているが生息個体数も少なく稀産種である。

概要

貝殻は小型で、殻高は13-14mm、殻径約3mmの細長い紡錘形で、暗褐色から黄褐色を呈する。殻表には粗い成長線がある。殻口は体層より前方にわずかに突き出てやや洋梨形。唇縁は白く厚く広がって反転する。上板はやや小さく縁位。下板は引き込み上板の方へ寄る。下軸板は現れない。主襞は側位、やや長い。上下腔襞は短くやや平行である。

参考文献

岡村一郎(1997) ヒメコギセル, しまねレッドデータブック(動物編): 388-389. 島根県.
岡村一郎(2004) ヒメコギセル, 改訂しまねレッドデータブック: 200. 島根県.
戸田顕史(2014) オオタキコギセル(ヒメコギセル), 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 252. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

県東部出雲地方にのみ分布するが、どちらかという山里的な樹林帯や社叢林に生息が見られる。しかし近年は次第に姿を消している。松江市の城山内もかつてかなり見られたが現在ではまったくみられなくなった。

存続を脅かす原因

森林伐採。
(執筆者: 戸田 顕史)

情報不足 (DD)

マイマイ下目 ナンバンマイマイ科

サイゴクピロウドマイマイ

Nipponochloritis occidentalis Azuma, 1982

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):小林和由

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



選定理由

本種は東正雄氏が島根県西部・吉賀町、安蔵寺山を基準標本産地として記載されたが、近年の調査において生体が確認できていない。

概要

本種は原記載によると、殻はこの属としてはやや大きく殻径18.5mm、殻高13.7mm、4層、殻は薄くもろく球状に近い暗褐色。殻皮上にはきわめて細かい毛状体の付属物がある。軟体部は黒い。

参考文献

増野和幸・川野敬介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査、特に微小種を中心として, ホシザキグリーン財団研究報告書, 21: 108-109.
増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原 大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況, ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
岡村一郎(1997) サイゴクピロウド, しまねレッドデータブック(動物編): 368-369. 島根県.
岡村一郎(2004) サイゴクピロウド, 改訂しまねレッドデータブック: 203. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

県内では安蔵寺山、枕木山で採取記録があるが、いずれも確認個体数は少ない。

近年、安蔵寺山一帯で調査が実施されているが、県西部での新たな記録はなされていない。しかし、県東部・雲南市付近では幼体、成体を含めた生息の確認報告がある。

存続を脅かす原因

森林伐採。
(執筆者: 戸田 顕史)

情報不足 (DD)

マイマイ下目 ナンバンマイマイ科

ヤマタカマイマイ

Satsuma papillibormis (Kobelt, 1875)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):増野和幸

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

近畿地方北部より中部地方北部へとかなり広い範囲に分布するが、中国地方東部になると生息が少なくなり、島根県では県東部の山地で報告がある。県西部ではまったく見られない稀産種である。

概要

貝殻は殻高30mm前後、螺塔の高い卵形。殻色は淡茶褐色で、周縁に細く淡い茶褐色の色帯があることが多い。軟体部は淡茶褐色（まれに黒褐色）である。

参考文献

増野和幸・川野啓介(2018) 島根県における陸産貝類の生息調査. ホシザキグリーン財団研究報告書, (21): 108-109.
増野和幸・佐々木隆志・渡辺勝美・小林和由・原大和(2025) 中国山地脊梁部における陸産貝類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 181-195.
岡村一郎(1997) ヤマタカマイマイ. しまねレッドデータブック(動物編): 372-373. 島根県, 島根県.
岡村一郎(2004) ヤマタカマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック: 201. 島根県.
戸田顕史(2014) ヤマタカマイマイ. 改訂しまねレッドデータブック2014: 253. 島根県.

県内での生息地域・生息環境

県内では山地に生息するが、確認情報は少ない。

存続を脅かす原因

森林伐採。

(執筆者: 戸田 顕史)



陸·淡水產貝類

絕滅
野生絕滅

絕滅
危懼Ⅰ類

絕滅
危懼Ⅱ類

準絕滅
危懼

情報不足